

第 1 編

第1章 「点字学習指導」の位置付け

第1節 点字学習指導の意義

1 点字学習の意義

点字を必要とする幼児児童生徒（以下、本書では「盲幼児児童生徒」という。）に学ぶ者としての充実感や自信が顕著に表れるのは、点字による読み書きができるようになる頃からだといわれる。盲幼児児童生徒は、点字の学習を始めることによって、主体的にもものに触れ、未知なものへの探求心や好奇心を満足させ、学ぶ楽しさを体験する。そして、点字を通して事物や自然現象、あるいは人とのかかわりや社会事象を認識するとともに、自己についての認識を確立していくのである。

また、中途視覚障害者（学齢期の途中で視覚を活用することができなくなった盲児童生徒を含む。以下同じ。）の場合、視覚を活用することが難しいという現実を受容することは容易なことではないが、それを受容する上で欠くことのできないのが点字の習得である。特に成人期以降に失明した中途視覚障害者の点字学習は、困難を伴うことが多い。以前は、見えることが当たり前であり、自由に本を読むことができたのに比べると、点字学習をすることは、じれったさやいらだたしさを感じることもあるが、点字学習が進むにつれて心の平静を取り戻すことができるようになる。これは、点字の読み書きができるようになることによって新たな自信が生まれ、学習意欲が高まるからであると考えられる。

このように点字を学習することは、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服し、自ら学ぶ意欲や主体的な思考力、判断力、表現力を培うことに結び付くといえる。

2 点字の機能と言語活動

点字の学習は、能動的な運動と受動的な感覚の二つの関係を媒介として行われる。触覚的な探索を通して点字学習への興味と関心が高まり、次いで点字を媒体として言語活動が盛んに行われるようになる。

点字には、二つの主要な機能があると言われる。その一つは、互いに伝達しあう対人間の伝達であり、他の一つは、個人の思考や動作を助ける個人内における伝達である。したがって、点字学習指導は、言語記号の習得とともに、盲児童生徒の言語記号の基盤となっている情報収集、思考などを深めることに留意して行う必要がある。そのためには、読書や作文の指導を通して、複雑多岐な情報の中から自分に必要な情報を的確に選択・処理できるような点字能力を身に付けることが大切である。そのことが、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服し、自己を充実させ、自立し、社会参加することにつながるのである。

3 点字の学習と言語能力

人間は、言語を媒介として意思や感情を伝達したり、知識を拡充したり、認識や思考を深めたりする。このように、言語は人間にとって極めて重要である。しかし、障害がある場合は、この言語の理解・表出に影響を受けやすいので指導上十分な配慮が必要である。

視覚障害のある幼児児童生徒の場合は、視覚によって読んだり書いたりする言語活動には制約を受けるが、話したり聞いたりする言語活動には視覚障害による影響をそれほど受けないと考えられる。それでも、視覚障害のために相手の顔の表情、身振り、態度などの理解が困難なこともある。また、行動や運動の面で制約を受けるために経験が不足したりする。そのため、視覚障害のある幼児児童生徒は、自分で体を動かし、自分の感覚でとらえて事物・事象や動作と言葉とを結び付けて認識することが困難な面がある。そこで、導入期の点字指導に際しては、事物・事象や動作と言葉とを対応させながら的確な概念の形成を図ることに十分留意する必要がある。人間の発達過程で獲得していく諸機能の中で言語ほど環境からの影響を受けやすいものはないといわれている。例えば、保護者が子供の動作や表情からその要求をすぐにくみ取って対応してしまうと、子供が自分の要求を適切に表現する力が身に付かないといわれる。その逆に、子供に話し掛けることや子供の話を聞いてやらない場合には、話すことに対する動機付けや言葉を身に付ける機会が不十分となり、言語発達の遅滞の原因になることがある。また、視覚からの刺激や情報が得られないことは、言語活動への動機付けや強化の面で影響を受けることがある。したがって、点字学習の導入期並びに展開期を通じて、言語能力の発達に影響を与えるさま

さまざまな要因との関係を考慮に入れた指導計画の作成が必要である。さらに、点字学習の指導に当たっては、単に文字言語としての指導にとどまることなく、話し言葉との関連や言語の理解・表出をも含めた総合的な言語能力の向上を図るようにすることが大切である。

4 点字と墨字との共通性

点字が視覚障害者の教育や文化の発展に果たしてきた役割は、極めて大きいものがある。視覚障害教育の歴史は、視覚障害者のための文字の開発や改善の歴史でもある。その流れは、洋の東西を問わず、当初は墨字（以下、本書では、視覚障害者の使用する「点字」に対して、点字ではない文字のことを「墨字」という。）との共通性の確保に向けられ、墨字を凸字化するための努力がなされた。しかし、この方法は、文字の共通性は確保できるが、読み書きの点で非効率的、非実用的であった。そこで、視覚障害者の読み書きの効率性を高めるための工夫・改善が行われ、「触読専用の文字」として点字の世界が確立されたのである。その結果、点字の効率性を保持しながら墨字との共通性を確保することが課題となった。例えば、オプタコン(図 1-1)による墨字へのアクセスや「六点漢字」「漢点字」による漢字仮名交じり文の表記は、点字と墨字との共通性を確保するための重要な実践であった。特に、日本語における表意文字としての多様な漢字・漢語と表音文字としての点字との接点を見いだすことが課題解決のポイントであった。現在では ICT*4 機器等の進歩により、不完全ながらも点字と墨字との自動変換が可能になり、コミュニケーション手段としての点字の位置付けに新たな進展がみられるようになった。したがって、これからの点字学習指導は、このような点字使用環境の電子化との関連を考慮して行う必要がある。また、点字学習指導の発展としてこれらに関する指導を位置付けることが大切である(第 11 章参照)。

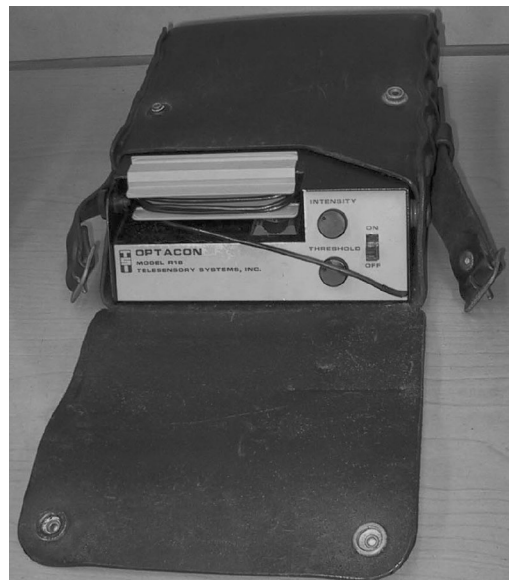


図 1-1 オプタコン